
清掃作業

春江口

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清掃作業

【Nコード】

N2291G

【作者名】

春江口

【あらすじ】

——簡単な清掃作業。それがそのページで唯一、目に留まった求人の仕事内容だった。

第一話 求人募集（前書き）

文章とか全然下手くそですみません。
もし良かったら感想ください。

第一話 求人募集

今日も暑い。

九月もそろそろ下旬にさしかかる頃だというのに、真夏並みに大きく腫れあがった太陽からの強烈な日差しが、部屋の温度を確実に上げていく。

少しばかりの涼風を期待して窓の方を見やる。

外からは元気良く遊びまわる子供達の声が聞こえる。

この炎天下のさなかで、無邪気に遊んでいられる子供達をうらやましく思ってしまう自分は、もう堕ちるとこまで堕ちてしまったのだろうか。

さっき買ってきたばかりのミネラルウォーターが早くも底をつく。

できればこの部屋にもエアコンをつけたい。

しかし、この歳になって、いまだにバイトを転々とするような状況の自分に、そこまでのお金の余裕はない。

額からにじみ出てくる汗をぬぐいながら、求人誌をぱらぱらとめくる。

人付き合いが極端に苦手な自分にできるような仕事は、そう簡単には見つからないだろう。

とは言え、背に腹は変えられない。

春に少しばかりのバイトをしてから最後、ここ何ヶ月間、まったく働いていないのだ。

そろそろ貯金が底を着く。

あせりからか、いつもより丁寧に募集記事を眺める。

どれもこれも長続きしそうのないものばかり。

とりあえず、生きていくための金がいる。

私はいつもであればあまり見ることもない、短期バイトのページにも目を通してみた。

——簡単な清掃作業。

それがそのページで唯一、目に留まった求人の仕事内容だった。

『日給一万円』

『野外での簡単な清掃作業です。夜間に働ける方を募集しています。初心者大歓迎!』

初めてみるような仕事内容に若干の不安を感じるものの、専門技術も必要なさそうだし、人と話す機会もありなさそうなのが、なにより好印象だった。

他の募集記事にも一応目を通して見たが、結局これが一番自分に向いている仕事のような気がした。

私はさっそくそこに書かれてある番号に電話をかけてみた。

「もしもし」

受話器から聞こえてきたのは、かなり威圧感のある声だった。

声の主が社名を名乗らなかったことに違和感を感じ、少し間を置く。しかし相手は一向に喋り出す気配がない。

番号を間違えたのだろうか？

恐る恐るこちらから声をかけてみる。

「あ、あの、求人募集広告を見たんですが……」

「ああ、清掃作業の？ 夜のバイトだけど大丈夫？」

「あ、はい、大丈夫です」

話を通じた安心感からか、幾分気が楽になった。

いつものこととは言え、応募の電話は私にとって一番の厄介事だ。大抵はこの時点で先方にあまり良い印象は持たれない。

今回は少なくとも面接まではこじつけられそうだ。

「君、名前は？」

「前田です」

「前田君ね、年齢は？」

「二十五歳です」

「ああそう。次の作業は来週の月曜になるんだけど、来れる？」

一瞬、返答に詰まる。

いきなり面接もなしで採用ということなのだろうか。

こんなことは初めてだ。

とりあえず肯定の返答をすると、当日の集合場所を指定され、こちらの連絡先を伝えると、先方はあっさりと電話を切った。

あまりのあっけなさに、私は不安を感じずにはいらなかった。

わずか一、二分の出来事だった。

そついや、具体的な仕事の内容を聞いてなかったな。

ひよっとすると、結構重労働なのかもしれない。

今まで数多くのバイトを経験していくうちに、学んだことがある。

『簡単な』作業とは、作業内容が単純であると言っただけで、決して

楽な作業のことではない。

とんでもない肉体労働だったり、劣悪な環境で働かされたり、という可能性もないとは言えない。

そう言う意味でも、仕事内容はちゃんと聞いておくべきだった。

まあ過ぎたことを悔やんでも仕方がない。

どうせ一回限りのバイトだ。

一日我慢すればいいだけのこと。

それにしても……。

野外の清掃作業ってなんだろう……。

私は心にひっかかる何かを感じながらも、わずかばかりの生活費を確保できた安心感からか、その日は久しぶりにぐっすりと眠ることができた。

記録的な残暑が続く、ある夏の日の出来事だった。

第二話 待ち合わせの場所

約束した待ち合わせ当日の夜、私は電話で指定された集合場所を探して、通りをうろろろしていた。

電話口の男は、居酒屋の向かいだと言っていた。

それらしき店は見つかったものの、その向こう側にあるのはただっ広い駐車場だけだった。

私はあせりながらもあちこち探し歩いてみたが、通りは民家が立ち並ぶばかり。

すでに集合時刻は過ぎている。
急がなければ。

その日はあいにくの雨模様で、ぽつぽつと小雨が降ってきていた。傘を持たなかった私は、しだいに前髪からしずくがしたたり落ちるほど濡れ始めていた。

事務所のような建物を想像していた。

しかし待ち合わせの場所はそうではなかったようだ。

先ほどの駐車場の真ん中で、数人の男が身を寄せて突っ立っている。こんな時刻に人気のない場所で、大の大人が数人でたむろっている姿は、かなり異様な光景だった。

多分、あれがそうだ。

私は様子を伺いながら、その集団に近づいてみた。

自分と同じ年代くらいの若者が四人と、明らかに歳の離れた中年の男が一人。

中年の男は、四人に向かって何やら説明をしているようだった。

「あの……」

私の声に気づき、皆が一斉に振り返る。

「前田……君か？」

中年の男は、手に持っていた紙に目をやり、そう言った。

威圧感のある声。

電話で喋った男に間違いない。

短く刈り込んだ髪型に、ノーネクタイのスーツ姿。

深く刻まれた目尻の皺が、顔の印象を一層いかめしいものにさせていた。

「遅れてしまつてすみませんでした」

怒られることを覚悟しながら集団の中にまぎれこむ。

しかし中年の男は、そんな私を意に介することなく、威勢のいい声で喋り出した。

「よし、これで全員揃ったな。じゃあこれから現場に向かうんで、俺についてきてくれ」

男はそう言つと、後ろに停めてある白い大きなワゴン車の方へと歩き始めた。

私を含めた五人の若者は、無言のままその後ろをぞろぞろとついて行く。

やはり普通の仕事ではなさそうだ。

私は漠然とそう感じた。

なんとなくではあるが、あの男からは『問答無用』というような雰囲気漂っている。

この段になっても、これからどこに行くのか、何をするのかすら知らされていない。

心臓の鼓動が幾分早まってきたのを感じ、私はワゴン車に乗り込む彼らの顔を、気づかれぬよう覗き見た。

これから共に仕事をする人達だ。
皆一様に不安そうな表情をしている。

きつと同じ気持ちなのだろう。
なんとなく性格も境遇も自分と似通った人達の集まりのように見える。

ただその中に一人だけ、髪の毛を茶色に染め、気の強そうな顔をした若者がいる。

正直言つて、気が合いそうにない。
なるべく関わらないようにしよう。

そんなことを考えながら最後に取り込んだ私は、二列目のシートに腰を下ろし、ゆっくりとドアを閉めた。

中年の男は後部座席に乗った我々に声をかけることもなく、無言で車を発進させた。

第三話 車の中

雨の降りしきる中、現場に向かう白いワゴン車は、静かな住宅街を抜け、木々がうつそうと生い茂る山道を走っていた。

しだいに明かりとなるものがなくなり、窓から見る外の景色は真つ暗で何も見えなくなっていた。

ラジオくらいつけばいいのに。

誰も何も喋らず、ワイパーの動く音だけが車内に響く。

そんな閉鎖的な空間が、これから何が起こるのかまったく予測のつかない未来への不安をいつそう煽った。

「あの、現場ってどこ行くんですか？」

突然、後ろの座席から、静寂を引き裂く男の声がした。

私は振り向いて声のする方を見た。

先ほどの茶髪だ。

当然の質問だろう。

しかし遅れてきた私はともかく、他の四人も行き先を聞かされていないというのか。

中年の男は運転に集中しているのか、それともワイパーの音で聞こえなかったのか、話そうとする気配がない。

茶髪は二列目のシートに身を乗り出しくて、もう一度同じ質問をしたところ、ようやく男は喋り始めた。

「……うちの規則でな、現場の詳しい場所は言えないことになって

んだ。まあ、後三十分くらいで着くから心配すんなって。誰も誘拐なんてしようとしてねえから」

中年の男の口調は、努めてフランクな雰囲気を出そうとしているようだった。

しかし、その奥に隠された不機嫌な感情を、私のか細い感覚器が敏感に感じ取ってしまった。

臆病がゆえの能力だ。

不愉快な雰囲気だけはすぐさま察知してしまう。

人と接した中で経験してきた数多くのみじめな出来事が、私をそうさせたのかもしれない。

「でも——」

「もちろん正当な理由があつてのことだぜ。変なことを勘ぐるなよ」

中年の男は、茶髪の言葉をさえぎり、そう言った。

平生な口調の中からにじみ出てくるガラの悪さ。

この男は恐らくカタギの者ではないだろう。

反抗すると何をされるかわかったもんじゃない。

茶髪もそれを察したのか、これ以上突っ込もうとはしなかった。

再び車内は雨の音だけになった。

みんな初対面とは言え、こんな密室に六人も人がいるというのに誰も喋ろうとしない。

見るものもない。

聞くものもない。

あまりにも窮屈な雰囲気、胸が締め付けられる思いがした。

私は救いを求めるように隣に座っている男を見た。

指をからませたり、腕を組んだりと落ち着かない様子だった。

ちらちらとせわしないそのしぐさを見ているうちに、ふと男と目が合った。

私は意を決してその男に話しかけようとしたちょうどそのとき、前にいた中年の男がくると振り返り、一層大きな声で喋り始めた。

「あいな、この際だから言つとくが、おまえらは仕事内容にいちいち疑問を持つな。質問されてもこつちが困るからな。おまえらは何も考えず、言われたことをその通りにやりゃいいんだ。いいか。これはおまえらのために言ってるんだからな。そこんところを良く憶えておけ」

男の口調はだんだんと抑えた感じがなくなってきていた。

普段の喋り方。

そんな調子だった。

「それから、ここで見たこと、聞いたことは誰にも喋るな。ろくなことになるねえからな。安心しろ、ちゃんと朝には帰してやるから」

『帰してやる』という言葉が、逆に安心できなくなること、この男は気がついてるだろうか。

車内にピリピリとした緊張感が走る。

やばいことになるかもしれない。

しかし、だからと言って今の私に一体何ができるのだろうか。

朝までには帰ることができる。

ただただその言葉を信じて、これから起こる事に身を任せるしかないのだ。

今更やめる訳にもいかない。

生きていくためにはお金が必要なのだ。

第四話・1 山小屋

山道はしだいに勾配を増し、いつしか砂利道にさしかかっていた。路面の凹凸がタイヤを通して自分の体に直接伝わってくる。

がたがたと揺れる車の中、私は真っ暗で何も見えない窓の外を眺めながら、胸の奥から湧き上がる不安と戦っていた。

もうずいぶん登ってきたが、一体どこまで行くのだろう。

三十分という時間は、とつくの昔に過ぎているというのに。

外は雨がいつそう強く降り出しているようで、会話するのが困難なほど、窓を直撃する雨の音が車内に響き渡っていた。

もちろん――。

誰も会話をしようなんて思っていないだろうけど。

結局、一時間ほど山道を走った後、少し開けた場所にたどり着き、ぽつんと建っている小さな山小屋の前で車はようやく止まった。

男は「着いたぞ」と一言後ろに声をかけると、目の前にある山小屋の中へと入って行った。

後に続こうと車のドアを開けると、車内に容赦なく雨が入り込んでくる。

私は急いで車から飛び降り、ぬかるみに足を取られないよう気をつけながら小屋へと歩いた。

なるべく濡れまいと皆が早足になっているようだった。

ばしゃばしゃと走ってくる足音が後ろから聞こえ始め、あっけなく私を抜き去る。

そのとき誰かにぶつかられたのか背中 of 辺りに衝撃が走り、よろめいた拍子にすぐ近くにいた人の肩に手をつけてしまった。
その肩の持ち主は、皮肉にもなるべく関わらないようにしようと決めていた茶髪の男だった。

「ちっ」

茶髪は露骨に不機嫌な顔をしながら大きく舌打ちすると、肩に置かれた手を勢いよく払いのけた。
ぐいっと左側に重心を持っていかれ、私はバランスを崩して水溜りに尻餅をついてしまった。

ばしゃん、という音とともに水しぶきがあがる。

茶髪はそんな私の方を振り返ることなく、小屋の奥へと進んで行った。

もたもたしていた自分が悪いのだ。

そう自分に言い聞かせる。

バイト同士の人間関係なんて、むしろこれくらいの方がちょうどいいじゃないか。

これでいいんだ。

これで気兼ねなく一人で仕事ができる。

私はその場を立ち上がり、ゆっくりとした足取りで皆の後を追った。
雨水が入り込んでずぶずぶになった靴を引きずりながら小屋の中に入ると、古びたパイプ椅子に座っている中年の男と、それを囲むようにして立っている四人の若者の背中が見えた。

私は急いで四人の列に加わってみたが、中年の男は周りの連中をほったらかして、どこかに電話をかけているようだった。

「ああ……、今着いた……。……五人だ。……ああ……」

しばらく終わりそうにない電話を待つ間、私は小屋の中を観察することにした。

辺りを見回すと、つるはしやスコップ、ヘルメットといった工事用の作業道具がたくさん壁に立てかけてあるのが見えた。どの道具も使われなくなっただけからしばらくたっているらしく、かなり痛んでいた。

隅っこにある大きな机の上には設計図のような紙が置いてあり、明らかにここが工事現場用に仮設された場所であることを物語っていた。

机もその上に置いてある紙もぼろぼろだった。

どうやら、この小屋自体は長年使われていないようだ。恐らく臨時にここを利用させてもらっているのだろう。

「よしおまえら、これを着ろ」

いつの間にか中年の男は電話を終えたようで、どこから取り出したのかしわしわになった雨ガッパを何着か手に抱えていた。

そしてお行儀良く整列して待っていた我々に、一つ一つ手渡していった。

「あとその長靴も履いという方がいい。ちゃんと紐を結んどけよ。地面がかなりぬかるんでるらしいからな」

私は雨具を受け取るついでに、思い切って頭の中にある疑問をぶつけてみた。

「あの、清掃作業って何をすればいいんでしょうか？」

「ああ、もうすぐ現場を仕切っている奴がここに来るから、詳しい話はそいつに聞いてくれ。まあやりながら憶えればいい。簡単な作業だ」

中年の男は面倒くさそうにそう言つと、再びパイプ椅子にどかっと座り、何かの書類に目を通し始めた。

第四話・2 山小屋

ほどなくして外から車のエンジン音が聞こえてきた。

そしてボタンと車のドアを開閉する音がしたかと思うと、全身泥まみれになった一人の男が勢いよく中に入ってきた。

「ひやあ、すっかり本降りになっちまったなあ」

男は軍手をはめた手でせわしく腕や足についた泥を払いながら、場違いなほど陽気な口調でそう言った。

雨具を深くかぶっているせいで顔は良く見えないが、声の感じからしてかなり歳がいつているようだ。

「現場の仕切りをやってる西さんだ。おまえら、これから西さんの指示にしたがって動いてくれ。じゃあ西さん、よろしくな」

「あいよ、ここにいる五人ね」

フードを脱いだ西さんの顔は、思った通り老人のそれだった。

白髪交じりの不精ヒゲと綺麗に禿げ上がった頭。

顔にはたくさん年輪が刻まれ、肌の色はどす黒く、目がくぼんでいる。

しかしながら、この老人のさきほどの所作は、顔が与える印象よりもずっと若く、非常にきびきびとしていた。

そしてその表情は、何が楽しいのかわからないが満面の笑みだった。

「こっちはもう作業してつからよ、ちよつくらわしらの手伝いをしてもらつよ。ええつとじゃあ、この三人は外の車に乗ってくる。石田さんが車中で待ってつからよ」

西さんは人懐っこい笑顔で矢継ぎ早にそう言うと、手前にいた三人の腕や肩をぺたぺたと触った。

「ほら、行った行った」

三人は西さんに促されて外へ出ていった。
残った二人は私と……、よりにもよって茶髪だった。

「あんたら二人はわしといっしょに来てくれ。八木さーん、車借りるよー！」

奥の机から中年の男が手を振る。
私はここへきて、ようやく自分の雇い主の名前を知ることができたことに気づいた。

これから仕事が始まるというのに、心配は増す一方だった。
唯一の救いは、西さんという人が優しそうなことだけ。
茶髪とは気が合いそうにないが、あの人とならきつとうまくやっていけるだろう。

私は大きな深呼吸を一つして、すでに外に出ようとしていた二人の後を追った。

第五話 現場

外はおびただしい量の雨が降っていた。
雨足はまったく衰える気配がない。

つらい作業になりそうだ。

それでも雨具を着るだけで随分マシになった。
激しい雨粒が体に与えるダメージをかなり軽減してくれている。

「あんだ、名前は？」

西さんはエンジンをかけながら、助手席に座った茶髪にそう尋ねた。

「鳥飼つす」

「鳥飼……、珍しい苗字だね。で、後ろの人は？」

親しげな笑顔がこちらに向けられる。

「前田です」

「前田君に鳥飼君ね。二人は知り合いなの？」

『とんでもない』

その一言が口から飛び出そうとしてあわてて飲み込む。

「いえ……、違います」

低いうなり声とともにワゴンが動き始める。

私の返答はちゃんと聞こえただろうか。

この雨の音では、後部座席から会話をすることが難しい。
できれば前の二人だけでしゃべってくれとありがたいのだが。

「この仕事はやったことあるんだっけか？」

「いえ……」

「ああ、そう。前田君は？」

西さんは後ろを振り向いたまま、器用に車を運転する。

「僕も初めてです」

「そうかね。今日はあいにくの天気で少ししんどいことになると思うけど、がんばってくれなあ」

その後もとぎれとぎれではあるが、かろうじて進んでいく車中での会話。

とは言え、その中身のほとんどが西さんからの質問に短いセンテンスで答えていく二人、といったものだった。

どうやらこの鳥飼という茶髪の男も、私と同じくあまり会話は得意な方ではないようだ。

その点では、奴も自分と似たような人種なのかもしれない。

私は少しだけ茶髪に親近感を覚えた。

三人を乗せたワゴンは、ほとんどけもの道と言っていいほど頼りない道を抜け、少し道幅が広くなったとある一角にたどり着いた。

そこには薄汚い軽トラックが一台停めてあり、荷台には大きなゴミ袋がいくつか置いてあった。

真っ黒で中身が何も見えないその袋は、しっかりとしたビニールでできており、雨粒をはじいてひときわうるさい音を出している。

私はそのゴミ袋を見て少し安心した。

これからやる仕事が本当に清掃作業なのか、それすら疑っていたからだ。

「さあ、ここからは歩きだ。ぬかるみに足を取られないよう気をつけてな」

西さんはフードの上から工事現場でよく使われる黄色いヘルメットをかぶり、それに装着されたヘッドライトを点灯した。ぱあつと周辺が明るくなり、周りの木々に光と影のコントラストが鮮明に現れる。

気味の悪い光景だった。
より一層山が大きく感じられ、その圧迫感に息苦しくなる。

「はい、これ持って」

西さんは私達に懐中電灯を手渡すと、老人のものとは思えないほど確かな足取りで、山の奥深くへと入って行った。
木々の合間を器用に抜け、その背中はあるという間に見えなくなつた。

見失ってはまずい。

茶髪と私は急いで後を追う。

土と雑草が入り混じり、雨でぐちゃぐちゃになった山肌をばしゃばしゃ音をたてながら強引に突き進む。

密生した葉が一段高い場所で空一面を覆い、自然の光を完全にシャットアウトしている。

それでも心もとない懐中電灯の明かりを頼りに、必死になって悪路と格闘しながらようやく前に行く西さんに追いつき、後ろについて

行く。

歩いても歩いても変わり映えのしない、うつそうとした険しい場所。足を踏みしめるたびに滑りそうになり、ちよつとでも気を抜くと置いて行かれそうだ。

ここで迷子になつては、本当に遭難してしまう。それくらい山深い場所だった。

こんな所にどんなゴミがあると言つのだろつ。

人が足を踏み入れることなどめつたにないような場所なのに。

ふとした疑問が頭をよぎる。

不法投棄されたもの。

例えば産業廃棄物とか。

すぐそばまで伸びてきている木の枝や葉が、顔や体にぶつかるのを感じながらぼんやりと考える。

すると、そんな私の疑問に答えるかのように、辺りから奇妙な匂いが漂い始めた。

樹木が濡れたときの青臭い独特の匂いに混じりながら、ほのかに感じる不快な悪臭。

前を歩いていた茶髪もその異変に気づいたのか、周りをきよろきよろと見渡し、匂いの原因をつきとめようとしている。

いよいよ現場に到着するんだな、と私は思った。

何かが腐つたような嫌な匂い。

これは……、生ゴミだ。

第六話・1 生ゴミ

「援軍を連れて来たよー」

泥沼のような足元を気にしずつつうつむいていた私は、西さんの大声にぱつと顔を上げた。

西さんのヘッドライトの明かりが、遠く前方を指している。一直線に伸びたその光には雨の軌跡ばかりが映りこみ、ほとんど何も見えない。

「おう、こっちこっち」

雨の音に混じって、遠くの方からかすかに声が聞こえる。

どうやら仲間と合流したようだ。

声のする方に近づくにつれ、先ほどから周辺に漂っているナマ物が腐ったような異様な悪臭は、一層きつくなっていく。

緊張で手のひらがしびれてくるのを感じながらさらに歩を進める。すると、仲間のものと思われる三人の背中が視界に入ってきた。

彼らは横に並んで何かを眺めているようで、じっと立ったままの状態だった。

そのうちの一人だけが、西さんと同じく頭に黄色いヘルメットをかぶっている。

残りの二人と比べて背が高く、広い背中をしており、雨具の上からもがっしりとした体格であることが容易に見て取れた。

「見つかったのかい？」

西さんがヘルメットの男のそばに寄り、声をかける。

「ああ、これだよ。結構大きいでしょ」

「へえ、これは大物だねえ」

二人は地面の方を見ながら、気楽な調子で会話をしている。

私は二人の視線の先に何かがあるのか気になり、さらに一歩前へ出て地面の様子を伺った。

第六話・2 生ゴミ

> i 9 9 5 8 — 1 4 2 6 <

そこには得体の知れない大きなかたまりが横たわっていた。
一見すると、それは真っ黒なクラゲのようだった。

たたみ二畳分ほどの巨大なクラゲ。

しかし海に生息するクラゲがこんな山奥にいるはずはない。

私は自分の見たものが信じられず、もっと良く見えるようにその物体に懐中電灯を当てた。

つるりとした表面には鈍い光沢があり、懐中電灯の光を受けてあやしげに光る。

本物のクラゲほど柔らかくないようで、頭部は陸地にありながらしつかりとお椀状に形を保っている。

その根元には触手のような細長い毛がみっしりと生えており、風呂場の排水溝にたまった髪の毛のようにだらしなく四方八方に垂れ下がっていた。

クラゲの死骸だろうか。

そう言えば、さつきから強烈に匂ってくるこの悪臭は、魚が腐ったような『ナマ臭い』匂いと形容した方が正確かもしれない。

確かエチゼンクラゲという種類は体長が二メートルくらいになるものもあると、テレビで聞いたことがある。

ただ形はそっくりだが、表面が黒い色をしていてキチン質の外骨格を伴っているようだ。

そしてとにかく大きい。

見ているだけで恐怖感を憶えるほどのサイズだ。

少なくともこれはエチゼンクラゲではない。

しかし、もしこれが何かの生き物だとして、こんなものが山の中を動き回っているのだろうか。

「いやあ、片付けるのに骨が折れそうだねえ」

西さんの楽しそうな声が、ザーという雨音に混じって耳に入る。

そんな西さんの姿を横目で見ながら、私はただただ啞然としてその黒いかたまりを見つめ続けるだけだった。

こんな生物なんて今まで見たこともない。

あまりにも見慣れない光景を目の当たりにして、私は声も出なかった。

何かに救いを求めるように、周りにいる人達を見回す。

西さんとその隣りにいる男以外は皆、呆然と立ち尽くし、微動だにしていない。

表情までは見えないが、私と同じくかなり驚いている様子が見て取れた。

「じゃあ、まずは解体しやすいようにひっくり返そうか」

自分の心情とはまるでかけ離れた朗らかな口調で言い放たれたその言葉は、なかなか自分の頭の中に入ってこなかった。

一人その場に取り残されたような疎外感にさいなまれ、急に周りの景色が現実のものとは思えなくなった。

「なんなんすか、これ？」

すぐ後ろから聞こえてきた声ではっと我に返る。

茶髪は奇妙な物体から目を離すことなく、こわばった口調でそう言った。

「ゴミだよ、ゴミ。これを片付けるのがわしらの仕事だよ」

西さんはおなじみの親しげな物言いですう言い放つと、硬そうな外骨格のへりの部分を両手で持った。

「ほれ、あんたらも持ちな」

背の高い男が強い口調ですう言つても、誰も動こうとしない。
当然だ。

こんな得体の知れないもの、触るだけでも躊躇する。

「バイトしに来たんじゃないの？ 働かないなら帰ってもらつよ！」

背の高い男が私の背中をどんと叩いた。

予想外にきつかった背中ของ痛みに、私はこの男の心情をすぐに読み取った。

これは命令だ。

やらなければ。

まったく頭が働かないまま、機械的に体を動かす。

雨具のポケットに入っていた軍手を取り出し、両手にはめる。

そして西さんの横に位置取り、同じように黒い物体のへりを持った。

そんな私の行動に影響されたのか、棒立ち状態だった周りの男達はようやく体を動かし始め、ゆっくりではあるが私達を手伝おうと『ゴミ』の方へと近づいて行った。

ただ一人、茶髪をのぞいて。

第七話 解体

西さんの「セーの」という掛け声とともに、巨大な黒い物体は雨の打ちつける地面にごろんところさがされた。

裏面があらわになるとともに、「ひいつ」という小さな悲鳴がどこから聞こえる。

そこには昆虫の足のような節々にとげのある細く小さな器官が、まるでたわしの目のように裏面いっぱいに生えていた。

今にもそのすべてがいつせいに動き出しそうで、私は思わず後ずさりした。

それは間違いなく生き物の死骸だった。

見た目からは節足動物だと思われるが、こんなに大きな種が地球上に存在するとは。

足の形状からして、恐らく地面を這うようにして移動するのだろう。

私はこれが生きているときの様子を想像し、身震いした。

「よし、じゃあ俺が解体するから」

背の高い男はおもむろに右手に持っていたナタを振りかざし、勢い良く生物の死骸を切りつけた。

死骸の中にある水分が、びしゃつと周辺に飛び散る。

外骨格に覆われた表面に比べてかなり柔らかいのか、ナタは奥深くまで突き刺さっていた。

我々がその光景を啞然として見守る中、男は容赦なく肉を裁断する

作業を続ける。

しだいにドロドロとした粘り気のある破片が辺りに散乱し始め、かなり広範囲にわたって地面を覆った。

どす黒く若干赤みを帯びたその破片は、まるで細切れにした牛肉のように生々しかった。

辺りに充満する強烈な腐敗臭が、より一層強くなっていく。

雨に打たれているせいか、時折ぶくぶくと泡が立ち、辺りは一気にこの世のものとは思えないおどろおどろしい光景となった。

私を含むバイトの人間達が何もできないまま突っ立っている横で、西さんが手際良く飛び散った破片をゴミ袋に詰め込んでいく。

私はその様子を見て、『ああ、なるほど』とひとりごちた。

なるほど、死骸を片付けるといって清掃なんだ、と。

第八話 口論

私はそこらじゅうに飛び散った生物の残骸を、一心不乱にかき集め、袋に詰める作業をしていた。

袋はすぐに一杯になった。

脇に置いてある新しいゴミ袋を取り出し、また破片を拾って中に入れる。

繰り返し繰り返しその作業を行った。

これの正体は何なのかなんて、私には関係ない。

言われた仕事をこなすだけだ。

自分に言い聞かせるようにそう思い、作業に集中することで、しだいに恐怖心は薄れていった。

ただ、普段運動をしていない自分にとって、思ったよりもきつい労働だった。

早くも腰の辺りから筋肉の悲鳴が聞こえ始める。

私は一旦手を休め、ゆっくりと立ち上がって大きく背伸びをした。

少し離れた所で、茶髪と背の高い男が向き合って何か話をしている。

解体作業はいつの間にか終わったようだ。

どこを見渡しても巨大生物の見る影はない。

二人の様子をぼんやりと眺める。

そのうち、だんだんと両者の声が大きくなり、こちらにも何を言っているのか聞こえるようになってきた。

「ここまで来ておいて、今さら何を言ってるんだ」

「だからこんな仕事だなんて思ってたんだよ」

どうやら口論が始まったらしい。

二人の異変に気づき、西さんがとぼとぼと近づいて行く。

「どうした？」

「いや、こいつが帰るって言い出して……」

「ただの掃除だと思って来たのに、あんな化け物の処理をするなんて一言も聞いてねえよ」

作業をするふりをしながらも、会話を盗み聞きしようと神経を集中する。

「わしらも雇われてる方だからバイトの内容は良く知らんけども、今から帰るつつてもそりゃ無理だ」

「そうだ。みんな文句一つ言わずにやってるじゃないか」

「あいつらはおとなしいだけだろ。俺はあいつらとは違う！」

茶髪の言った言葉に思わず鼻から笑いが漏れた。
何言ってるんだ。

一番怖がってるだけじゃないか。

「なんなんだよ、あれは！ 襲ってきたりしないのかよ」

西さんは茶髪の肩に手を置き、なだめるようにぼんぼんと軽く叩いた。

「あのねえ、鳥飼君だったか。八木さんから言われなかったっけ？」

「……何を？」

「知らない方がいいと思うよ。知らなくても仕事はできるでしょ？」

茶髪は下を向いてぶつぶつと何かをつぶやいている。

かろうじて聞けた言葉が「まともな仕事じゃない」みたいな悪態だった。

西さんは深いため息をついた後、言葉が続けた。

「いいかい。あれは危険な生き物じゃないし、この仕事はちゃんとしたところからの依頼で受けた、まっとうな仕事だよ。確かに八木さんは何も教えてくれないだろうけど、それは知らない方がいいからなんだよ。さあ、もう作業を始めようよ。とりあえず朝までにここを片付けないと困るんだよねえ」

茶髪は下を向いたまま動こうとはしなかった。

西さんと背の高い男は、茶髪に向かってしばらく説得を続けていたようだったが、あきらめた様子でその場を去った。

私は一人取り残された茶髪を横目で確認した後、吐しゃ物のように汚らしく辺りに散乱する残骸を袋に詰める作業に戻った。

それにしても日中あれだけ暑かったのに、今はなんて寒いんだろう。手がかじかんで思うように動かない。

せめて防水加工された軍手が欲しかった。

ひよっとして、と思い、作業用具をかためて置いてある一角を探してみた。

残念ながらそこには、新しいゴミ袋とナタが数本置いてあるだけだった。

すぐそばで西さんが作業をしている。

西さんは私に気づくと、「前田君」と声をかけてきた。

「あんた悪いけど鳥飼君を下の小屋まで連れてってやってくれんかね。入り口に停めてある軽トラを使っていから。もちろん彼を下ろしたら、またここまで戻ってきてな」

西さんは私に車のキーを手渡すと、そのまま別の場所へ移動してしまった。

「あ、はい」

私は気のない返事をした。

やれやれ、車の中に茶髪と二人きりか。

第九話 小屋までの道のり

「冗談じゃねえよ。訳のわかんねーことさせようとしやがって!」

車に乗り込むなり、茶髪は大声で毒ついた。

かなりお怒りの様子だ。

だがそんな茶髪の様子に構うことなく、私は無言のまま車を走らせた。

若干雨足が弱くなってきたのか、フロントガラスごしの景色が、行きの時よりもはっきりと見える。

確か一本道だったはずだから、この道に沿って進めば目的地にたどり着けるだろう。

往復で十分少々くらいかかるか。

しかし、こんな狭い空間で十分も奴と過ごさなければならぬとは、うっとうしいことになったものだ。

「おい、おまえは何とも思わないのか?」

助手席から茶髪が話しかけてくる。

声の調子にイライラしている感情が見え隠れしている。

こういう状態の人間と会話をするのが一番苦手だ。

何を言っても怒るのだから。

私はどう返答して良いのかわからず、とりあえず適当な言葉を並べようとした。

しかし茶髪は私の返答を待ってくれない。

徐々に語気を強めながら言葉を続ける。

「あの気味の悪い生き物だよ。おまえも見ただろう？　ありや一体なんなんだ」

「さあ、俺に聞かれても……」

茶髪は足を小刻みに上下に揺らし、フラストレーションをあらわにしている。

「見るからに危険そうじゃねーか。絶対なんかあるぞ、あの化け物みたいなやつ」

「うーん、何とも言えないけど……」

「俺達をここまで運んできたあの八木って野郎を良く見たか？　見るからに悪人だろあいつ。ヤバい仕事を俺達に手伝わそうとしてんだよ。おまえもそう思うだろう？」

茶髪は私の返事などどうでもいい感じだった。

自分の言う事に同調し共感してもらうことで安心感を得たいだけのように見えた。

早く山小屋に着かないかな。

私は茶髪とのやり取りが少し面倒になり始め、自然とアクセルを踏み込む力を強めていた。

「だいたいあんなバカでかい生き物に襲われでもしたら命の保証はねえぞ。危険な仕事だってわかってて隠してんだよ」

「でももう死んでたし、ゴミ袋に詰めるだけなら別に——」
「もし死んでたとしても！」

突然の大声に私はびっくりした。
ハンドルを切り損ね、車の挙動がおかしくなる。

なんとか立て直そうとあわてて急ブレーキをかけると、後輪が横滑りをおこし、道の中央で半回転しながら車は止まった。

私は大きく息を吐いて胸をなでおろした。

驚いたことに茶髪は今の出来事をまったく意に介さず、私に向かって会話の続きを始めた。

「ここでの事は誰にも喋るなっていうことだ？ 知られるとマズいことなのか？ だからこんな真夜中にこそそとやるんだろ？ 違うか？」

茶髪は明らかに我を失っていた。

肩で息を切らし、ものすごい形相で私をにらめつけている。

「いや、俺に言われても……」

私の返答が気に入らないのか、茶髪は舌打ちし、さらに顔を歪める。

「なんなんだよ、おまえも八木って奴も、この仕事も！」

大声でそう言くと、深々と助手席のシートにもたれかかり、そして何も喋らなくなった。

私は何の言葉も返さず、無言のままキーを廻し、エンジンをかけ直した。

確かにヤバそうな仕事だということは、私にだってわかる。

それにしても、こいつは何をそんなに怯えているのか。

激しい感情を目の当たりにすればするほど、急速に冷めていく自分がいた。

落ち着きを取り戻すにつれ、茶髪の言動・行動が滑稽に感じた。

多分、茶髪の方がより一般的な人間の感性を持ちあわせているのだらう。

私の考え方はおかしいのかもしれない。

しかし――、と私は思い直す。

八木さんにしても西さんにしても、我々を深入りさせようとはしていない。

何も知らないまま無事帰ることができれば、何の問題もないはずだ。

むしろ何かを知ろうとすればするほど危険になる。

今まで生きてきた経験が、そう自分に警告する。

ことなかれ主義かもしれないが、一方で切羽詰った現実がある。

私はどうしても生活費が必要なのだ。

あとちょっと走れば小屋に着くだらう。

うっとうしい時間もう少しの辛抱だ。

とは言え、あの不気味な生物を片付ける作業を考えると、こっちの方が幾分マシだったかもしれない。

第十話 小屋の中

> i 9 9 6 0 — 1 4 2 6 <

「なんだおまえら。どうかしたのか？」

奥にあるパイプ椅子に座り、煙草をふかしていた八木さんは、思いがけない来訪者に驚いた様子だった。

「俺、今日のバイトはやめるんで家に帰してください」

茶髪は小屋に入るなり、何の前置きもなく、出し抜けにそう言った。

「はあ？ 何言ってたおまえ」

煙草の灰を落としてしまったのか、八木さんはひざの辺りを手で払いながら、すつくと立ち上がった。

茶髪の背中ごしに、恐る恐る八木さんの顔を見る。

容赦のない突き刺すような視線が、こちらに向けられている。

相手を威嚇する目だ。

私は自分に向けられている訳でもないその鋭い眼光に耐え切れなくなり、思わず横を向いた。

すると、今まで気づかなかったが、見慣れない一人の男が部屋の隅に立っているのが見えた。

この場にはおおよそ似つかわしくない、グレーのスーツをかつちりと着こなしたサラリーマン風の男。

いつの間にここへ来たのだろう。

男はおどおどした様子で二人のやり取りを見ている。

「なんかあったのか？」

八木さんはその場に突っ立ったまま、さらに低いトーンで声を発する。

「いえ別に」

「じゃあなんでやめるんだよ」

言葉に詰まる茶髪。

ひりひりとした緊迫感に胸が締め付けられる。

私ならもうこの辺りで喋ることさえ無理になるだろう。

「ちょっと……、仕事の内容がヤバそうなんで……」

茶髪の返答に八木さんの顔がゆがむ。

ゆっくりとした足取りでこちらに近づいてくる。

「あれを見ておじけづいたか」

「そうじゃねえよ。いかかわしい仕事はやらねーつってんだよ」

「なんだと、おい」

険悪な雰囲気小屋中に漂う。

この先どうなってしまうのか。

もみあいになったら止めるべきだろうか。

「どこがどういかわしいのか言ってみろよ」

八木さんは茶髪のすぐ目の前まで行って立ち止まり、相手をにらめつけた。

その気配に圧倒されたのか、茶髪はうつむき、何も言い返さない。

そのまま、まるで時間が止まったかのように二人は動かない。

ぴーんと張り詰めた空気が辺りを支配し、私はあまりの緊張で手がしびれ始め、吐き気を催した。

「や、八木さん、無理強いはいけません。仕方ないのであきらめましょう」

静寂を破ったのはスーツの男だった。かなり無理をしている感じではあったが、なんとかこの場をおさめようとしている。

しばしの間、八木さんは茶髪を威嚇し続けていたが、小さく舌打ちをするときどきびすを返し、部屋の奥にあるパイプ椅子に腰を下ろした。

「わかったよ。好きにするがいいさ」

新しい煙草に火をつけ、ふうつと煙を吐きながらそうつぶやく。

茶髪は意外だと言わんばかりに驚いた様子で顔を上げた。

とりあえず一触即発の状態は回避され、私は安堵感から大きなため息を一つついた。

案外あっけなく身を引いたな。

仕事の内容が内容だけに、ひょっとするとこっとう事態はよくあることなのかもしれない。

「だが、みんなの作業が終わるまではここにいてもらうぜ。帰ろうにも足がないからな。それからバイト代は出せないがそれでもいいんだな？」

八木さんの言葉に茶髪は何も言わず、ふてくされた態度ですぐそばにあった角材にどかと座った。

第十一話 電話

険悪な雰囲気、に気圧された私は、八木さんに声をかけるタイミングをすっかり失っていた。

とりあえず一言あいさつしてからこの場を立ち去ろう、と思いつつもなかなか口を開けない。

もういつそのまま出て行ってしまうか、と扉の方へ足を進めたとき、八木さんは部屋の隅っこで申し訳なさそうに立っているスーツ姿の男に話かけた。

「内海さんよ、あんたの口から仕事の内容をこいつらに説明してやってくれんか。若造どもがいがわしいとかなんとかって因縁つけてくるからよ」

内海と呼ばれたスーツ姿の男は、驚いた表情で八木さんに顔を向ける。

「え、ほ、本気ですか？」

かなり動揺している様子だった。

八木さんは『冗談だ』とでも言うように笑いながら手を振り、茶髪に向かって話を始めた。

「この人は一流企業の会社員でな、ちゃんとした人だぜ？俺はこの人から依頼を受けてこの仕事をやってんだ。なあ、内海さん」

「え、ええ、まあ」

「ここに依頼書もある。どうだ、これでもいかがわしいか？」

机に置いてあった紙切れに手をやり、見せ付けるように高々と上げた。

しかし、茶髪は横を向いたまま見ようもしない。

八木さんの視線が、今度は自分の方に向く。

「なあおい、前田君よ。ちゃんとした仕事だろう?」

どうやら八木さんは、私もボイコットしようとしていると思ったようだ。

早く誤解を解かなければならない。

「い、いや、俺はこの人を連れてきただけなんで……」

「なんだ。じゃあさっさと現場に戻れよ」

八木さんの口調は、明らかに不機嫌な感情を含んだものだった。まったく茶髪のせいだとんだとばかりを受けたもんだ。

「ああ、ちょっと待って」

八木さんは扉に手をかけた私に向かってそう言うと、上着の内ポケットから携帯を取り出し、電話に出た。

通話音量が大きいのか、相手の話し声が携帯から漏れる。

特徴のある喋り方から察するに、どうやら西さんからの電話のようだ。

八木さんの顔色がみるみるうちに変わっていく。
嫌な予感がする。

現場で何か異常事態が起こったのかもしれない。

「おい、話が違っじゃねーかよ」

携帯から顔を離し、スーツの男に向かってそう叫ぶ。

「何かありましたか？」

男の問いかけにすぐに返答せず、八木さんは私達の方をちらりと見た。

一瞬ためらった様子だったが、すぐに男の方へ近づいていき、話を続ける。

「生きてるのが一匹見つかったらしい。アレの処理は全部そっちでやるんじゃないのかよ」

小声ではあったが、一語一句がきちんと耳に届いた。

生きてるって？

あのクラゲのような生物が？

「こつちが請け負ってるのは死骸の回収だけだぞ。どうすんだよ」
「そ、そんなはずは……」

スーツの男はあわてた様子でスーツケースの中からクリアファイルを取り出し、中に入っている書類を確認し始めた。

「しかし、報告書にはすべて処理済と書いてあって……」

「そんなもん見てもクソの役にも立たねえよ。すぐ上司に電話しろ」

「でもこんな夜更けに……、多分寝てると思いますが……」

「だから電話で叩き起こすんだろ？ おまえじゃ話になんねえんだよ」

男はあたふたとしながら携帯を取り出し、私達に背を向けるようにして電話をかけ始めた。

話の内容を聞かれたくないのだろう。

不測の事態が起こったことは間違いないようだ。

緊迫した空気が小屋中に充満している。

「……西さん、悪いけどすぐに小屋まで来てくんねーかな」

まだ電話で会話を続けている八木さんの方を見る。

いらいらした様子はあるものの、話ぶりからは恐怖感は感じ取れなかった。

しかしこの男なら、たとえあの生物が人を食らうような化け物でも、怖がるそぶりを他人には見せないだろう。

ああ、家に帰りたい。

徐々にはあるが、私はこのバイトに参加したことを後悔し始めていた。

第十二話 午前三時

どろ沼に飛び込んだような、真っ黒に汚れた姿の西さんが息をきらしながら小屋に入ってきた。

「雨はやんだようだよ。あんなにどしゃ降りだったのにねえ」

わざとどうでもいいような話題から切り出した西さんの表情は、それほど深刻そうではない。

だがこの男もまた、八木さんと同じく見た目から感情を読み取れる人間ではない。

「本当に見たんだな？」

八木さんはさつさと本題に入りたいようで、西さんの姿を見るなり食いつくように身を乗り出す。

「きちんと確認はしなかったけど、あれだけ図体がでかけりや間違いつてことはないね」

「そうか。で、見たのはあんただけか？」

「ああ。ただでさえみんな戦々恐々としてんのに、あんなのが生きてるって知ったら、気が動転してどうなるかわからんしね」

八木さんは幾分ほっとした様子だった。

前かがみになっていた上半身を元に戻し、背もたれに寄りかかる。

「んで、これからどうすんの？」

「今、社の人間に連絡させてるんだが……、おい、つながったか？」

スーツの男は携帯を片手に持ったまま、力なく首を横に振る。

「出ませんね……」

「じゃあ、なんべんもかける」

ぴしやりと言い放った八木さんの声に、ふうつとため息をつき、再度電話をかける内海さん。

表情からは、半分あきらめている感じが見て取れる。

そりゃ、こんな時刻に電話をかけても誰も出ないだろう。

私はポケットから携帯を取り出し、時間を確認した。

午前三時を過ぎたところ。

ここへ来るまでに一時間以上かかったことを考えると、そろそろ引き上げる準備をしていないと朝までに帰ることができなさうだが。

「どうすんだい？　とりあえず回収した分だけでも持って帰るかい？」

西さんの問いかけに、八木さんは答えようとしなない。神妙な面持ちでじつと壁を見つめたまま動かない。これからどうすべきか考えあぐねているようだった。

「こつちでできることは、これ以上もうないと思うよ。アレにしたってどんなもんかわかんないし」

西さんがあおるように言葉を続ける。

たつぷり十秒ほどの時間をかけ、ようやく八木さんは神経質そうに鼻をかきながら、口を開いた。

「そうだな。後は内海さんにまかせるか」

その言葉に内海さんがあわてた様子で会話に割って入る。

「ちょ、ちょっと待ってください。今晚中にすべて回収してもらわないと困るんですが」

「だったら、今晚中にすべて処理してもらわんなあ」

あきれたと言わんばかりの口調で西さんが返す。

「やっぱ、回収作業には処理側の人間も同行させた方がいいんじゃないか？」

「いやいや、処理班にそんな時間はとれませんよ」

内海さんは体の前に両手をつき出し、おおげさに首を振って必死にアピールする。

そのやりとりをじっと見ていた八木さんは、「ふん」と鼻で笑い、

「でも、こういうときに何かできる人間がいないとな」

と口を挟む。

「ですから、こうして私が立ち会って——」

「立会いつてのは、なんかあったときにそれ相応の対処をするためにいるんだろ？ あんたはこの状況を解決してくれるのかい？」

「それは……」

内海さんはそう言ったきり、黙りこくってしまった。

また沈黙の時間が、このせまい山小屋の中に訪れた。

刻一刻と状況が悪くなっていく。

何か良くないことが起こりそうな予感。

そういった悪い予感は、たいていの場合的中する。

それは人間という生き物が、幸福よりも災いの方に敏感であるからだ。

「なあ」

真剣なまなざしで西さんを見据えた八木さんが次に発した言葉は、
とんでもないものだった。

「こりゃ俺達でなんとかしなきゃならねえんじゃねえか？」

第十三話 虫

八木さんの一言によって小屋の中に流れる空気が、より一層冷たいものとなった気がした。

『なんとかしなきゃ』とは一体どういうことだろう。

彼らの言葉で言うところの『処理』をするということなのだろうか。どうか『俺達』の中に自分が含まれていませんように。

「あんた本気で言ってるのかい？」

西さんの表情から初めて笑顔がなくなる。

眉間に皺を寄せ、じつと八木さんを見つめている。

「俺は夕方までに千葉まで帰らなきゃならないんだ。西さんだって今日中に自分の家に帰りたいだろう？」

「にしたって、わしらに何ができると言っの？ また日をあらためて来りやええ話じゃないの」

確かにその通りだ、と思う。

八木さんにしてみれば、余計な仕事を引き受けることになるのだから、なんの得にもならないはずだ。

何か急がなければならぬ理由でもあるのだろうか。

そのとき八木さんが『何か言え』とでも言わんばかりに、内海さんの方をじろりと見た。

その視線に気づいた内海さんは、ひとしきり頭を掻いた後、やがて口を開いた。

「勝手な言い分だとは思いますが、できれば予定通りに回収してもらいたいのですが……」

申し訳なさそうな顔をしてはいるものの、本当に身勝手な言い草だ。上の尻拭いをやらされるのは、いつだって末端の人間だという典型的な社会の縮図。

私はなんとか西さんがこの理不尽な要求をつっぱねてくれるよう、心の底から祈っていた。

しかし、西さんから発せられた言葉は、私の期待を大幅に裏切るものだった。

「確かにここで中断したら、回収がかなり遅れるだろうなあ。ちょっとまづいかなあ」

なんとなく、ある程度の事情を把握しているような口ぶりだ。やはりこの男もあっち寄りの人間ということだろうか。

「そうだろ？　ここはさつさと片付けて、早いとこ切り上げようや」
「しかし、アレがどんなものかもわからないのに、どうやってやるんだい？」

「あんただって元々は処理側の人間だっただろ？　やり方はわかってるはずだ」

「もう随分と前の話だよ。それに、直接処理にかかわったことは一度もないよ」

「大丈夫、なんとかなるだろ。なんならその二人を連れてっていいから」

後ろから、がたと大きな音がした。

角材に座っていた茶髪が勢い良く立ち上がったようだ。

「何勝手なこと言っただよ！」

顔を真っ赤にして大声でそう叫ぶ。

今度ばかりは茶髪に同調せざるを得ない。

「俺は何もやらねえからな」

茶髪は吐き捨てるようにそう言い、再度角材の上に座りなおす。仏頂面でその様子を見ていた八木さんは、両手を頭の上に置き、天井を見上げながら何かを考えているようだった。

「まあなんにしても、なんの情報もないのにやれつつても無茶な話だな」

西さんがぼつりとつぶやく。

すると、何かを思い出したかのように八木さんが急に立ち上がり、内海さんの方へと近づいて行く。

「確かそれ報告書だったよな。ちよつと見せてみる」

八木さんが机の上に置かれたかばんの中に手を入れる。

「これは社外の人間には見せられないことになってるので――」

まるで何も聞こえていないというふうな、平然とかばんに入っていた書類を取り出し、中身を確認する。

内海さんはなかばあきらめた顔でその様子を見守っていた。

しばしの間、部屋に沈黙が舞い降りる。

私はまんじりともせず、書類に目を通す八木さんを見つめた。

まさか、その書類からなんらかの情報を手に入れて、「さあやれ」とくるつもりなのだろうか。

果たして私は、八木さんの命令に反発することが出来るだろうか。これからどういう展開が待ち受けているのか、まったく予想ができないだけに不安でしょうがない。

「レベルDってなんだ？」

八木さんがおもむろに口を開く。

「さあ……、報告書の中身までは……」

「本当にわかんないのか？ 隠してんじゃないだろうな？」

内海さんはうつむいたまま、何も返事をしない。

「多分、種別のことだろうな」

西さんの声だった。

「種別？」

「ああ、生物の特徴とか大きさなんかで種類ごとに分けてるんじゃないかってわけか」

「ほう、で、レベルDってのはどんなやつなんだ？」

八木さんは手に持っていた書類から目を上げ、食いつくように西さんを見つめた。

「レベルDっていうのがなんなのかはわからんけども、さっき山の上で動いているやつを見た限りだと、ありや多分虫だね」

「虫だつて？」

「ああ、死骸のときは気づかなかつたけど、二本の長い触覚が生えてたよ。ぴよこぴよこ動かしながら移動してつたからね」

「そうか、虫か……」

八木さんはそう言うと、近くにあつた椅子にゆっくりと腰を下ろし、足を深くくんだ。かなり険しい表情をしている。

——虫。

私は西さんの口から出たその言葉に少しばかりの違和感を感じた。二本の触覚と外骨格に包まれた体。それはまさしく虫の特徴だ。

現に私は、あの生物を節足動物だと推測した。しかし西さんの言い方は、クワガタを指して「これは虫だ」とでも言うように、まるで当たり前のことを口にした感じだった。

あれは未知なる生物ではないのだろうか？

確かに西さん達はかなり長いことこの仕事をしているようで、そういう意味では特に珍しいものでもないのかもしれない。

しかしあんな生物は、今まで一度も見たこともなければどこかで習った記憶もない。

あんなに特徴的な身体を持っている生物ならば、少なくとも本などで一度くらいは見聞きしていてもいいはずなのに。

どう考えても私の中の常識では、特殊な事情を持った生物だとは思えない。

本当にあんな生物が地球に存在していていいのだろうか。

「虫だったらなんとかなるんじゃないか？ まさか肉食ってことはなかるう」

「まあそうなんだろうけど……」

西さんは力なくそう言つと、私の方をちらりと見た。

それがたまたまなのか、何か意図を持ったものなのかは私にはわからなかった。

第十四話 出発

「やってくれるよな？ もちろん金は払う」

それが当然だと言わんばかりの口ぶりで八木さんは言った。

どれくらいの危険が伴うのかはわからないが、かなり無茶を言っている気がしてならない。

相変わらず西さんの表情は固く、以前のようなへらへらした態度が微塵も感じられない。

かなり切羽詰った状況なのだろうか。

「人にやれやれと言うからには、当然あんたも来るんだよな？」

西さんの言葉は、思いのほかとげとげしい言い方だった。

片方の眉毛をつり上げ、少しだけ驚いた様子を見せた八木さんだったが、すぐにいつもの不機嫌そうな表情に戻る。

茶髪との言い合いの際に見せた、相手を威嚇する目だ。

「いや、俺はここに残るよ。他の連中の面倒も見なきゃならんからな」

「あんたはいつだって現場に出てこないんだな。なんか来れない理由でもあるのかねえ？」

西さんはそう言いながら、シャベルやつるはしが立てかかっている壁の方に顔を向けた。

壁の方を見た、というよりも、意識的に視線を逸らしたと言った方が正しいかもしれない。

そんな西さんを睨みつけながら、八木さんが口を開く。

「大勢の人間が働いてんだ。誰かが指揮を取らなきゃらんだろ？山の中に入れば携帯がつかないことだってある。俺と連絡が取れないなんてことになったらみんな困るだろ」

西さんはしきりに左のわき腹を丁寧に手でさすっていた。顔は相変わらず壁の方を向いたままだ。

「それに、いつでも社の人間とやりとりできる状態にないとな」

八木さんの言い分は恐らく正しい。

しかしこのままでは、西さんを説得するのは難しいだろう。

あんな大きな生物を、老人一人でなんとかさせようとしているのだ。無理を押し付けるにもほどがある。

もつとも、次に八木さんが言う言葉はほぼ予想できることだが。

「前田くんよ。西さんを手伝ってやってくれんか。バイト代も色つけてやるから」

そらきた。

おとなしそうな自分なら、言われれば従順に従うと思ったのだろう。もちろんこの重苦しい雰囲気の中、茶髪のように反抗する勇氣は自分にはない。

ここまでは予想通りの展開だった。

「わしはあんたが行かない限り、やらないから」

西さんのこの発言は予想外だった。

なぜ八木さんに固執するのか理由がわからない。

人手が足りないだけなら私でも充分のはずだ。

むしろなんだかんんだと理屈をこねて、結局何もしなさそうなあの

男が同行しても、何か役に立つとは思えないのだが。

気のせいかもしれないが、両者の間に何か確執のようなものがあるのだろうか。

八木さんもそれに薄々気づいているのか、あえて「なぜ自分が」という問いをしない。

ふん、と鼻を鳴らすと、そのまま黙りこくってしまった。

正直八木さんが行こうが行くまいが、もうどちらでもいい。

いずれにせよ、山に入ることになれば、自分も同行せざるをえないのだから。

できれば一刻も早くこの仕事を終わらせ、家に帰りたい。その思いでいっぱいだった。

「わかったわかった。俺も行きやいいんだろ」

八木さんは勢い良く立ち上がりながら、なかばやけくそ気味にそう言った。

「ただし、今回は見に行くだけだ。『処理』はしない。それでいいか？」

西さんはわき腹をさするだけで、何も言わない。

「内海さん、ご覧の通りだ。残念だが今日中に回収するのは無理そうだ」

そう言われた内海さんは、力なく何度もうなずきながら、

「仕方ありませんね」

と小さくつぶやいた。

「とりあえず回収班だけでは処理できなかったとでも報告してくれ。俺が現場に立ち入ったことで、あんたのメンツも保てるだろ」

「はい。そうします……」

そのとき西さんはおもむろに立ち上がり、壁にたてかけてあったシヤベルを一本手に取った。

何度も何度も持ち直し、手ごたえを確かめている。

「用心のためにこれを持って行くよ」

まるでこれから一戦交えるかのごとく、大きく振りかぶっては真下に振り下ろす。

やる気満々じゃないか。

「おまえはどうする？ バイト代出してやるぜ？」

扉に向かいながら茶髪に話しかける八木さん。

しかし茶髪は座っていた角材にごろんと横になり、行く気がないことをアピールした。

「じゃあ行ってくる」

私を含む三人は、山小屋を後にした。

第十五話 山の中（前書き）

すみません。茶髪をどうしても連れて行きたいので、しゅしゅ同行することになったことにしてください。

（さすがド素人の書く小説……）

第十五話 山の中

> i 9 9 6 1 — 1 4 2 6 <

西さんの案内で連れて来られた場所は、初めて死骸を目撃した例の清掃現場だった。

雨で洗い流されたのか、地面には小さな破片すら残っておらず、きれいに何もないう状態となっていた。

辺りを見回すも、いっしょに作業をしていた人達はもう誰もいない。恐らく他の作業場所に移ったのだろう。

「こつちだよ」

西さんは持ってきたシャベルを肩にかつぎ、さらに山の奥へと歩いて行く。

それに続く私。

ちよつと間隔を置いて、やる気なさそうについてくる茶髪と八木さん。

四人は会話をするでもなく、ひたすら道なき道を登って行った。

「おい、あんまり建物に近づくなよ」

八木さんが前に行く西さんに向かってそう言う。

しかしながらどこを見渡しても建物のようなものはみつからない。奇妙に思い、思わず後ろを振り向く。

八木さんはどこから拾ってきたのか、がっしりとした棒つきれを右手に持ち、適当に振り回しながら歩いていった。

余計な詮索はやめよう。

知らなくていいことだ。

西さんはほとんど斜面を登って行く。
徐々に後ろを歩く者たちとの距離が開き始める。

老人にしてはえらい体力だ。

ぼんやりとそんなことを考えていると、突然西さんは立ち止まり、
その場に身をかがめた。

地面にある何かを見ているようだった。

しゃがんだまましばらくじっとしていたが、追いつく間もなく再び
歩き出す。

私はその場所までたどり着くと、同じく身をかがめて地面を見てみ
た。

そこにはカブトムシの幼虫のような、うす汚れた白い虫の死骸があ
った。

しかし、あまりにも大きい。

十センチはあるつかという大きさ。

こんな虫は見たことがない。

これもあの生物と関係があるのだろうか。

ふと気づくと、後ろから二人の足音が聞こえてくる。

なんとなく追いつかれるのがいやだった私は、すぐに立ち上がり、
後ろを振り向くことなく前へと歩いた。

だんだんと勾配が増していき、辺りは一層山深くなっていく。

西さんがまた何か気になるものでも見つけたのか、右奥の方向にラ
イトを当て、少しでも歩調を緩める。

ライトに照らし出されたのは、ぼろぼろに崩れた一本の木だった。

その木まで近づくと、丁寧にも木の根元を観察している。

ようやく追いついた私は、西さんの視線の先を見る。

木の根元はどろどろに腐ってぼつこりと穴があいていた。

西さんが穴の中にライトを当てる。

そこには異様な光景がひろがっていた。

穴の回りは粘度のある液体で覆われており、白く濁っていた。

穴の中にはクモの糸のようなものが四方八方に張り巡らされ、たくさん小さな虫たちがその糸に等間隔でぶらさがっている。

雨に濡れたのか、皆一樣におしりの部分に一滴のしずくを携え、糸をつたって規則正しく同じ方向に移動している。

その様子はまるで、何かの秩序を持った社会を形成しているようだった。

思わず声が出そうになった私は、あわてて口を手でふさいだ。

得体の知れない秩序、調和のとれた動きというのは、それはそれは気味の悪いものだ。

カルト宗教の儀式のような不気味さ。
とにかく気味が悪い。

「なんだこれは？」

後ろから声が聞こえる。

振り返ってみると、八木さんがすぐ後ろに立っていた。

懐中電灯を逆手に持ち、木の窪みをより一層明るく照らす。

「うわっ」

悲鳴のような声が聞こえる。

どうやら最後尾をちんたら歩いていた茶髪も、ここに追いついてきたようだ。

「コロニーだな……。この山はもう手遅れじゃないのかい？」

西さんがぼつりとつぶやく。

八木さんは苦虫をつぶしたような渋い表情をしたまま、何も言おうとしない。

コロニーとは何か。

手遅れとはどういう意味なのか。

私は喉元まで出かかったその言葉を必死の思いで飲み込んだ。

第十六話 山の奥深く

私たちは奇妙な虫たちがいた場所から、さらに五分ほど歩いていた。もうどのくらい山を登っただろうか。

急勾配と足元のぬかるみのせいで、あまり距離は歩いていないだろう。

しかし、小屋を出てからもう随分と時間が経つというのに、一向に生きたクラゲは見つからない。

そろそろ自分の体にも疲れが出始めていた。

西さんの足取りはいまだに力強く、しっかりと地面をとらえて前へ前へと突き進んで行く。

そんな西さんの背中をぼんやりと眺める。

クラゲを探しているというよりも、どこかに向かっているようにも見える。

そのうち、木々の間隔が一層狭い険しい場所にたどり着き、そこで西さんは足を止めた。

「ああ……」

嘆くように西さんが小さく唸る。

棒立ちで木々の奥深くをじいつと見つめている。

いよいよクラゲを見つけたようだ。

しかしその割にはあわてた様子がない。

鼓動が高まるのを感じながら、西さんに近づく。

視線の先にあるもの。

そこにはたくさんの黒いクラゲが、木々の根元に身を潜めるように密集している姿だった。

体長二メートルに達しようかというものもあれば、一メートルにも満たないものまで、大小様々な大きさの物体が隙間なくびっしりと集まっていた。

一体、何匹いるのだろう。

暗くてよく見えないところにもいるとすれば、その数は四、五十にもなるのではないだろうか。

恐怖で手が震える。

こんな集団に襲われたらひとたまりもない。

しかし、眠っているのかクラゲたちはまったく動こうとしない。

死んでいるのだろうか。

私は、この生物を初めて見たときのことを思い出してみた。
あれはすでに死骸だった。

『処理班』と呼ばれる集団が『処理』をしたのだ。

しかし……。

はたしてこんなにも多くの数をいっぺんに処理できるものなのだろうか。

この生物の図体は人間と比べても十分に大きい。

そして死に至るまでにかなりのダメージを与える必要があるはず。

一匹しとめるだけでも大変な作業なのではないか。

あらためて目の前に広がる光景に目を落とす。
やはり、『群れを成している』という形容の方が正しいようだ。

ふと、その密集した黒い背中に一筋の光が走る。
茶髪が不用意に懐中電灯を当ててしまったようだ。

「おい、ライトを消せ！」

八木さんの声には、今までにないほどあせっている様子が伺えた。
あわてて懐中電灯のスイッチを切る茶髪。
幸いなことに、クラゲたちが動く様子はない。

「いいかおまえら、近づくんじゃねーぞ」

押し殺した声で八木さんが言う。

「とりあえず、今日はこれで終わりだ。引き上げるぞ」

たった一目見ただけで、あっという間に引き返そうとする八木さん。
予想をはるかに超える事態となっているようだ。

西さんは放心した様子で、いまだにクラゲたちの背中を眺めている。
八木さんの雰囲気からして、ここにじっとしていることが危険であることに間違いない。

私は西さんの腕をそっとつかみ、引き返すよう促した。
しかし西さんの体はまるで石化したように全体が硬くこわばり、まったく動く気がしなかった。

『この山はもう手遅れじゃないのかい？』

西さんの言葉がふと頭によぎる。

急に寒気が襲ってきた私は、その場を早々に離れ、八木さんの後を追った。

第十七話 帰り道

幾分地面の状態がましになっている場所で、八木さんと茶髪がぼーっと突っ立っている姿が見えた。

二人は会話をするでもなく、その場にただ立ちつくしていた。ひよっとすると私や西さんを待っていてくれたのかもしれない。

「西さんは？」

私の気配に気づくと、八木さんはすぐに声をかけてきた。

「まだあそこにいます」

八木さんは小さく舌打ちすると、足早にクラゲの密集地帯へと向かった。

かなりあせっている様子だ。

今まで随分と余裕の振る舞いを見せてきた八木さんだったが、今はせわしなくきびきびと動いている。

とめどもなく不安がこみあげてくる。

すぐ横にいる茶髪は当てにならない。

奴が達者なのは口だけだ。

茶髪は腰に手を当て、空を仰いだりうつむいたりと落ち着かない様子だった。

「やばいことになったな……」

独り言のようにそうつぶやく。

「このまま二人で逃げるか」

「え……」

茶髪の思いがけないその言葉に、私は返答に困った。

逃げる？

誰から逃げるんだ？

「このままじゃヤバイぞ」

確かに私たちはまずい状況に置かれている。

あの二人だって一体何者が怪しいものだ。

しかし、この場を逃げたところで何になるのだ。

人数が減ると襲われたときに余計に危ない。

四人でいた方がはるかに安全だ。

「あの二人から離れない方がいいと思うよ。色々と詳しいようだし。それに、どっちみち山を降りるためには車がいるんじゃないかな」

車のキーは西さんが持っている。

たとえ逃げたとしても、家に帰るまでの移動手段がない。

奴は恐怖心にかられて、思考回路がおかしくなってるんじゃないのか？

クラゲに近づくことにはなるが、むしろこんな奴放っておいて、八木さんの後を追うか。

色々考えるうちに、奥の茂みから足音が聞こえてきた。

その足音はだんだんと大きくなり、やがて西さんを抱えた八木さんの姿があらわれた。

八木さんがつかんでいた腕を乱暴に振りほどくと、西さんは少しよろめいて前のめりの体勢になる。

「大丈夫だ」

そう言った西さんの口調は弱弱しかった。

しかしすぐに背筋をぴんと伸ばし、先頭を切って歩き始めた。

私たちは順調に山を降りて行った。

下りだからなのか、それともクラゲに対する恐怖心からか。

四人の足取りは、行きとは比べ物にならないほど早いものとなっていた。

一番前に行くのは西さんと八木さんの二人。

そのすぐ後ろを茶髪が軽快な足並みで歩いている。

行きはあれだけだらだと歩いていたくせに。

一気に腹立たしい感情が押し寄せる。

しかしそのおかげで、幾分恐怖心が和らいだことに気づいた。

蒸し暑くてとつくに脱いでしまった雨具を小脇に抱え、ぬかるみに足を取られないよう慎重に歩く。

ときおり吹く風が濡れた体を急速に冷やし、真夏にこれだけの運動を強いられているにもかかわらず、随分と快適だ。

ふと、するどく突き出た木の枝が、むきだしになった白い腕のすぐそばをかすめる。

すばやく腕をひっこめ、また地面に気を遣いながら歩き出す。

辺りの景色を見る余裕が出てきた私は、歩きながら廻りにある木々の状態を観察した。

行きに見た変な虫がいなかどうか確かめるためだ。

そろそろ日が昇るのか、辺りはだんだんと明るくなっている。

木々のすきまの遠いところも、肉眼で確認できるまでになっていた。

そこに何か違和感のある存在。

私は木々のすきまから、椀状の黒い物体を見つけてしまった。

立ち止まって目を凝らす。

徐々に目の焦点が合ってきたのか、その物体が間違いなく例のクラゲであることを確認した。

「クラゲだ！」

その言葉は口には出なかった。

物体はゆっくりとした動きで右横に移動し、手前の木の陰に隠れて見えなくなった。

私はあわてて八木さんたちの後を追った。

前の集団からずいぶん距離があいていたようで、なかなか三人の姿が見えない。

危なかった。

一人のときに襲われでもしたら……。

どんどんと加速するスピード。

足が前へ前へと自然に動く。

いつのまにか私は全速力で走り出していた。

ようやく三人の背中が見える。

「待ってくれ！」

私はその言葉を発すると同時に、ぬかるみに足元をとられて派手にこける。

三人は憮然とした顔で、無様に尻餅をついた私を見下ろした。

「ク、クラゲがいました」

皆一様に驚いた顔をする。

「どこだ？」

「後ろの方です。木の陰に隠れて見えなくなりました」

みな首を左右に動かし、クラゲを探す。

しかし、どこにもそれらしい姿は見えない。

「まあ、全ての個体が眠ってるとは限らないからね。現にわしも回収中に動いてんのかを見かけたわけだしなあ。活動してるやつが一匹二匹いてもおかしくないさね」

西さんの言葉や表情は、以前のそれに戻っていた。

「それよりも早く山を降りた方がいい」

西さんは私の肩をぽんと叩くと、しわくちやの顔に笑みを浮かべた。いつもの通りの西さんに戻ったようだ。

心臓の鼓動はなかなか戻らないものの、ざわついていた心がだんだんと穏やかになる。

私はゆっくりと立ち上がり、三人の後を追った。

さらに五分ほど歩くと、また例の清掃現場に戻ってきた。

八木さんはそこで立ち止まり、

「少し休憩しよう」

と言つて、胸ポケットから煙草を取り出した。

皆息が切れているのか、肩が上下に動いている。

知らぬ間にかなりの速度で歩いていたようだ。

私も今まで気がつかなかった疲労を自覚し、その場に座り込んだ。

「これからどうすんだい？」

西さんは煙草に火をつける八木さんを見ながら、おもむろに口を開いた。

「とりあえず内海の野郎に報告だ。バイトは全員解散させて、俺と西さんはここに残る。残念だったな。今日中に家に帰るのは無理そうだぞ」

西さんは「はあ」とため息をつく、またぼつと降り出した雨の中、うらめしそうに天を仰いだ。

よかった、ようやく帰れる。

バイトは全員解散。

確かに八木さんはそう言った。

うれしさがこみ上げる。

茶髪もさぞや安心したことだろう。

思わず茶髪の方を見る。

しかし、茶髪の顔には驚きの感情しかあらわれていなかった。

視線の先には、雨に濡れてどす黒く光る椀状の物体がいたからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2291g/>

清掃作業

2011年4月13日22時15分発行